

## 巻頭言：地球環境問題と植生史研究

ある意味ではチェルノブイリの大惨事が端緒となっているともいえるソ連経済行き詰まりの暴露とその後の急速な世界情勢の揺れ動きは、地球環境問題への急速な世論の高まりとその国際的動向に大きく関係しているとみられる。こうした動向のなかで1990年から実行段階に入ったIGBP活動はわたしたちの研究活動にも大きく関係するものとして、すでに関係学協会の機関誌などに日本における政府への勧告や研究計画の内容が報告されてきたことは周知のとおりである。IGBPはInternational Geosphere-Biosphere Programmeの略で、地球圏—生物圏国際協同研究計画と訳されている。IGBPはきわめて大きな研究計画で、いくつかの大きなコア計画からなる連合体と考えてよいが、いずれのコア計画をとっていても広領域にまたがる植生史研究に関係しないものはないといってもよいほどで、国際協同研究計画への具体的かつ積極的な参加があつてしかるべきものであろう。また、こうした研究計画にあつて個々それぞれの局所性の強い資・試料の集成や再検討が施されるのも有意義なことと考えられる。すでに実行段階に入っているとはいえ、日本における対応はかなり遅れているともいわれ、中心的なコア研究計画のいくつかは国際的にもまだ実質的な実行段階に入っていないものもあるということであるが、この際、植生史研究においても研究計画の検討に入るとともに、規模の大小を問わず具体的な組織的活動に入る準備が進められてもよいだろう。

IGBP活動や本誌の大場秀章氏の総説で紹介されているIPCCのような関連性の高い国際研究計画の活動では国際的な組織的研究活動や情報交換を押し進めるために、種々の国際会議や国際協同研究が図られている。こうした研究計画においてしばしば指摘される問題は、国際的な研究業績の奪い合いであったり、資料集成の時間との競争であったりする。グローバルな観点から重要な地域とみられていても資料がきわめて乏しい地域や、そうでなくとも資料蓄積がまだまだ必要な地域は対象とする時代が古くなればなるほど多くなるものだが、そうした資料の一次生産が停滞してしまい、研究業績の争奪戦に陥ってしまうのは、けっして建設的なこととは思われない。このあたりの難しさや利点などについては、本年9月号と10月号の中央公論に吉良竜夫・小松左京両氏の「人間と自然のつきあい史」と題する対談でも述べられているが、研究計画がとてつもなく大きいだけに、研究を押し進める一方では、あるいはその前提として国際協同研究に伴いがちな諸問題を考慮していく必要はあるように思われる。すくなくとも基礎的な一次生産活動に汗水流す生産力と労力が途絶えることがないように、そして、そうした生産活動が集成のための単なる兵隊活動とならないように充分考慮してかかることが大切である。なぜなら、基礎的一次生産には大量の資料集成やそれに付随する方法論の開発とは違った、学問展開していくうえでの大きな可能性がつねに潜在していると考えられるからである。

植生史研究において集成のオーソドックスな方向性として古植生図を描いたりより長時間スケールにわたるボーリングコアの解析や複数の長時間ボーリングコアの国際対比があるが、上記のような観点に立てば、必ずしもこうした方向性に拘束されることもないように思われる。たとえば、歴史時代における植物群・植生の認識はこれまでどの程度のものであつたらうか。いままでほとんど歴史学的手法に依存してきたその時代の自然史とはいえば、資料蓄積はもとより方法論の開発にしてもおそらく見向きもしなかったというのが正直なところではないだろうか。あるいはまた、植物社会の歴史的変動についてさえ、現生の生態学理論の行き詰まりを打開し古植物社会の復元とその長時間スケールでの変動をとらえる手法の開発に優れた材料である埋没林や埋没土壌に見向きもしなかったのではないだろうか。これまであまり手着けることがなかった材料に新たな視点を見出す方向は、大きな研究計画を進めるうえで、案外とんでもない効果をもつように思われる。

最近、歴史学、民俗学、考古学のいろいろな催しにおいて環境をめぐる問題が次第にクローズアップされてきたように感じるのはわたしばかりではないだろう。領域を越えてやがて資料の集成を迎えることになると思われるが、それぞれが利用可能な情報のみを先取りし、ひたすら業績争奪戦に陥らないとも限らない。相互の信頼と領域を越えた真の広領域を構築すべく、底辺から密接な討論を続けていこうというのが広い範囲におよぶ植生史研究会の大きな目標の一つである。